



知識も技術も学歴も、身につけるだけではなく、生かして初めて価値がある

株式会社日本コンピュータ開発 相談役最高顧問 高瀬 拓士

1. はじめに

当社は好不況に関係なく、毎年一定数の新卒大学生の採用を行ってすでに28年が過ぎた。その自社採用体験とともに、一般社会での大学生の就職活動や就職後の経過を見ていて、最近の学士という学歴を持つ大学生の価値に疑問を持つとともに、その「就職活動も就職も間違っている！」とさえ感じている。

学士としての価値に関しては、その浅く、狭く、潤いのない乾いた学力からは、とても最高学府で学んできたという印象を受けないし、その精神的なひ弱さや単純・幼稚な行動からはとても22歳の大人になっているとも感じられない。面接試験で学生時代の過ごし方を聞くと、卒業に必要な単位取得には関心があるものの、学業そのものに意欲的に取り組んでいると答える、あるいは取り組んでいると感じられる学生は意外に少ない。大学にとっても新入生の学力不足のため、学士に相応しい教育を推進することに困難さがあり、その対策を協議・研究するため日本リメディアル教育学界という組織も立ち上げているという。大学入学以前の教育を含めて、教育の目的、学校教育の役割は一体何なのか、真剣に考えるべき時に来ていると思う。

一方で、就職活動もその結果としての就職も間違っていると感じる好例が、「就職超氷河期と言われるなかで、学業を犠牲にしてまで厳しい就職活動をしてやっと確保した就職先を、就職後3年以内に

その30%以上もの人がいとも簡単に退職する」という実態である。この現象はこの10年以上にわたって日本社会では常識と言われている。しかも多少景気が上向いて求人数が増えると、就職活動する学生達にとっての売り手市場などという言葉も聞かれ、そういうなかで就職した人達は就職後3年以内どころか、半年間で40%前後もの人達が最初の就職先を退職しようとして行動し始めるというテレビニュースを見たこともある。そういう人達は、その後も‘転職’を繰り返し、その内に社会不信から自信をなくし、ニートといわれる存在になっていく人もあると聞く。このようなことでは、たとえ高度(?)の教育を施して先端の知識や技術を教え、学士という資格を与えて社会に送り出したとしてもそれを生かさず、貴重な人生の時間をただ年齢を重ねるだけに消耗してしまうことになるのではないだろうか?多くの大学では学生部・就職課などが前面に立って、キャリアカウンセラー有資格者や企業OB、現役の人事担当者なども導入して、学生達の就職指導やキャリア教育に取り組んでいると聞かすが、それは主に就職率の向上を目指しているだけで、本当の意味での就職指導になっていないのではないだろうかという疑問が湧く。就職率の向上は大切なことではあるが、それは目的ではなく手段にすぎないということを忘れないようにしたいものだと思う。

そのようななかで6年ほど前のある日、大学生のみの採用を続けていた当社の採用試験に高専生の応募があった。それを機に当社の採用対象学生範囲を大学生から高専生に広げ、さらに今年は初めて公立

技術短期大学校生からの応募が有り、その採用にも取り組んだ。その結果として感じることは、これまで面接で対応した高専生や技術大学校生は、学士などという学歴はなくても、学校の教育方針の下で勉強の習慣を身につけ、基礎となる知識や技術を良く学び、素直な就職意識を持ち、年齢相当の大人に成長しているということである。このグローバル化という厳しい環境の中にある日本社会の将来に取って、私は彼らに大いに期待したいと考えている。

2. 学生達との接触体験から

私は7年前にビジネスの第一線を退く以前から、ボランティアとしての講演活動で各地を飛び回っている。その目的は主に次代を担う若者達を対象にして、生まれて74年、社会に出て55年になった私の人生体験を語り、これから生きていく自分の人生を彼らが考える上での参考として提供することにある。

各地の大学から依頼を受け、特別講義や就職ガイダンス・キャリア教育での講師を務めることが多いが、最近では高専でも始まったキャリア教育での講師依頼を受けることも多くなった。正規授業としての高専キャリア教育では、その講義対象生徒が1年生から3年生であることが多い。その講義の開始に当たって、私の最初の一言は、対象学生の学年に関係なく常に「皆さん、高専への入学おめでとう！」で始まる。それを聞いた学生達はキョトンとしているかクスクスと笑い出す場合が多い。それもそのはず、学生達は入学して以来、1年生でもすでに数ヶ月、2年生以上はすでに1年以上もの年月が経っているからである。それを承知の上で私はあえてそのように話し始める。その「おめでとう！」という言葉には、この学校の学生達が、「私が学士としての価値に疑問を持つような大学に進学せず、この学校に入学してよかったね」という思いがある。もし私が、最近採用活動で取り組み始めたあの公立技術短期大学校でキャリア教育講師を務めることになったとしても、私はきっと高専同様のあいさつで始まることになると思う。それはなぜか？

私は教育の原点は人間育てだと考えている。まずは子どもたちを年齢相当の人間に育て、器を広げ、その器に人間として、社会人として生きていく上で必要な知識や技術を満たし、それを活用する力を持った人間に育てることだと考えている。

そのようななかで大学は教育の場としての最高学府である。しかしながら私が長年の採用活動で出会った大学生達は、卒業に必要な単位数の取得には関心があっても、学ぶ意欲に欠けていると感じることが多い。大学は知識の詰め込みは行っても、人間育てにどれほどの関心があるのだろうかという疑問を感じさせることが多い。人間育てをせず、器を広げることでもせず、ただ知識や技術を詰め込んでも、詰め込んだはずの知識や技術は器に入りきれずにあふれ出し、一方で残った知識や技術も生かされず宝の持ち腐れとなるだけである。大学卒意識はあり理屈は言えるものの、知識は浅く、狭く、潤いのない乾いて表面的、How to 的である上に、その行動を見ていると22歳にしては精神的に幼稚で中学生並との印象で、その上に遊び癖がつき過ぎていると感じる学生が多い。3学年修了時点での取得単位数は110~120単位程度で、4年間を通して最終的には125~135単位前後で卒業できるという。

ところが私が採用面接で出会う高専生の多くは「面接試験での対応は大学生のそれに少しも劣ることなく、落ち着いて自己主張もでき、年齢相当の大人に成長しているだけでなく、なんと言っても勉強癖が身につけている」という実感がある。最近新たに採用を始めた県立技術短期大学校生は、入学初年度だけでの取得単位数が80単位ときわめて多く、面接試験でも落ち着いて適切な対応ができ、高専生同様勉強で鍛えられているとの実感がある。全国すべての大学生、すべての高専生や短期大学校生がそうだというつもりはない。しかしながら採用を通じての多くの経験から、私は「高い授業料を払ってまで大学に進学しなくて良かったのではないか」との思いから、つい高専生に対しては「高専への入学おめでとう」と言ってしまうのである。このことは短期大学校生に対しても同じかと思う。

3. 何が目的で進学し、そこで何を学ぶのか？

かつて社会全体が貧しかった時代、日本には大学の数が少なく、入学競争率は高く、学力的にも経済的にも進学できる人、あるいは進学する人の数は限られていた。1939年に大分県の片田舎、貧しい農家で、10人兄弟姉妹の下から2番目として生まれ育った私は、中学生のとき、東京の大学への進学を目指して普通科高校の受験勉強に力をいれていた。そんなある日、どこかでその話を聞いた年の離れた次兄に呼びつけられ、「その日の生活もままならない貧しいなかで、10人もの子どもを高校に進学させることだけでも大変な状態なのに、普通高校に進学して大学まで行くとは何事か!？」と叱られた。現実の貧しい生活実態を知りながら、進学することが親を苦しめているということには全く気づいていなかった。さらに、大人でさえ生活費を稼ぐのに悪戦苦闘

しているなかで、子どもがアルバイトなどで学費を稼ぐことができるなどとは思ってもみなかった私は、その場で大学進学という希望を捨て、職業高校である工業高校への入学を決断し、高校卒という学歴で社会に出たという思い出がある。小学校、中学校を通じて1学年は2クラス、合計約80人だった同期生の中で大学へ進学したのはわずかに1人。多くの同期生が中学卒業だけで社会に出て行った。私の育った時代はそんな時代だった。今はどうだろう？

文部科学省の情報に寄れば、近年の大学数および大学進学率の推移はそれぞれ表1、グラフ1の通りである。

表1、グラフ1が示す通り、近年の大学数の増加と進学率の向上は著しい。特に最近その傾向が強いのは、社会全体が豊かになったことはもちろんのこと、それだけではない理由があると思う。

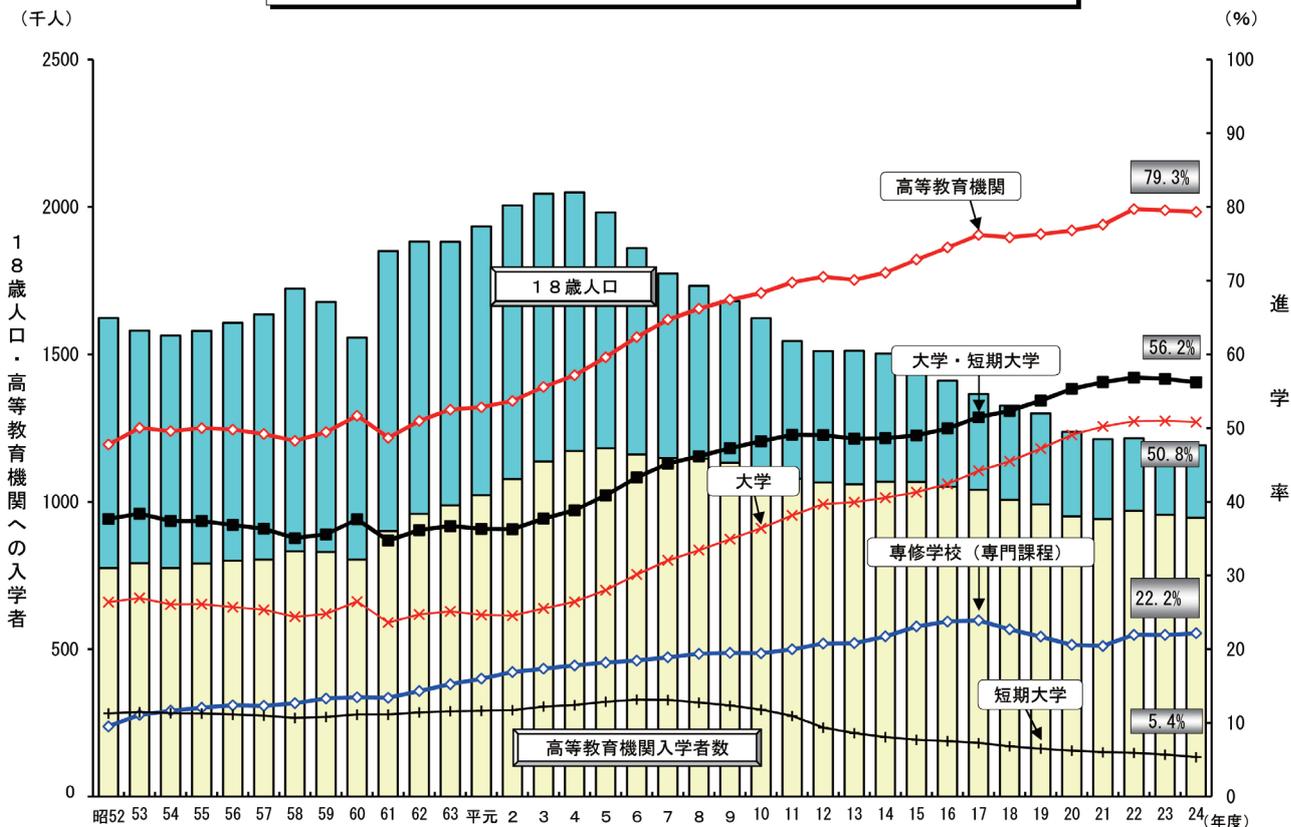
少子高齢化が急速に進む日本社会のなかで、その流れに逆らうかのように、新たなニーズに応えると

表1 大学数の推移
(文部科学省学校設置数推移データから、短期大学、大学、各種学校のみ抜粋)

区分	短期大学	大学	各種学校	区分	短期大学	大学	各種学校	区分	短期大学	大学	各種学校
昭和23年	...	12	1,405	46	486	389	8,056	6	593	(1) 552	2,934
24	...	178	3,402	47	491	398	8,045	7	596	(1) 565	2,821
25	149	201	4,190	48	500	405	8,035	8	598	(1) 576	2,714
26	180	203	5,144	49	505	410	7,999	9	595	(1) 586	2,601
27	205	220	5,674	50	513	420	7,956	10	588	(1) 604	2,482
28	228	226	6,071	51	511	423	7,000	11	585	(1) 622	2,361
29	251	227	6,741	52	515	431	6,094	12	572	(2) 649	2,278
30	264	228	7,305	53	519	433	5,737	13	559	(2) 669	2,164
31	268	228	7,732	54	518	443	5,508	14	541	(2) 686	2,069
32	269	231	8,075	55	517	446	5,302	15	525	(2) 702	1,955
33	269	234	8,015	56	523	451	5,027	16	508	(4) 709	1,878
34	272	239	8,033	57	526	455	4,867	17	488	(4) 726	1,830
35	280	245	8,089	58	532	(1) 457	4,674	18	(1) 468	(4) 744	1,729
36	290	250	8,061	59	536	(1) 460	4,474	19	(1) 434	(5) 756	1,654
37	305	260	7,952	60	543	(1) 460	4,300	20	(1) 417	(6) 765	1,585
38	321	270	7,940	61	548	(1) 465	4,124	21	(1) 406	(6) 773	1,533
39	339	291	7,931	62	561	(1) 474	3,918	22	(1) 395	(6) 778	1,466
40	369	317	7,837	63	571	(1) 490	3,685	23	(1) 387	(6) 780	1,426
41	413	346	7,897	平成元	584	(1) 499	3,570	24	(1) 372	(7) 783	1,392
42	451	369	7,925	2	593	(1) 507	3,436				
43	468	377	7,991	3	592	(1) 514	3,309				
44	473	379	8,024	4	591	(1) 523	3,202				
45	479	382	8,011	5	595	(1) 534	3,055				

(注) 1 国・公・私立の合計数である。
2 本校・分校の合計数である。
3 「大学」は新制大学のみである。
4 ()内の数値は通信教育のみを行う学校数で別掲である。

高等教育機関への入学状況(過年度高卒者を含む)の推移



(注) 1 18歳人口とは3年前の中学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者数をいう。
 2 高等教育機関入学者とは、大学学部・短期大学本科入学者数(過年度高卒者等含む)、高等専門学校第4学年在学者、専修学校(専門課程)入学者である。また、それぞれの進学率は入学者を3年前の中学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者数で除した比率である。

グラフ1 大学進学率の推移
(文部科学省高等教育進学率推移データから)

いう名目で大学が新設されたり、かつての専門学校や短期大学を次々に大学へ格上するという形で、大学数は増加している。その結果、学生達はお金さえあれば容易に大学への入学が可能になり、大学は学生数の獲得に四苦八苦し、最近では募集定員に満たない大学の比率が全大学数の50%近いという事態になっている。今やビジネス化した大学にとって定員数未達はそのまま経営難を意味し、入学試験の合格レベルを引き下げてまで生徒数の確保を行ったものの、今度は学力不足が日常の大学教育に支障を来し、その対策を協議し解決するため、日本リメディアル教育学会を組織するという事態になっている。

一方で現役大学生に学生としての関心ごとを尋ねると、1,2年生などは「卒業に必要な単位を取得すること」と疑問も持たずに答える。そして「卒業単位さえ取得すれば良いとの考えから、あえて単位取

得難易度の低い科目を選んで受講する」という学生は多く、学びに意欲的な大学生に出会うことは少ない。また、3年生後期以降の学生に同じ質問をすると「希望通りの就職をすること」との答が返ってくる。この答が悪いとは思わないが、大学を卒業さえすれば就職できて当たり前、就職できないのは景気の悪い就職氷河期の就職活動となり、自分達は不運」と考えているようで、学士としての価値ある学生生活を送ったのかどうかにかねが及ぶことはないようである。

一方で私は、ある巨大な国立大学からの依頼を受けて、過去数年間にわたって行った特別講義の対象者は1年生。「目標の大学へ入学したという‘目的達成’で、学生生活の目標を見失い5月病にかかる学生が多発する。そこで入学後の学生生活をどのように位置づけ、過ごしたらよいのか、人生の先輩と

してのアドバイスをしたい」という。定員確保が難しいなかで容易に入学した学生と違って、厳しい入学試験を突破して入学した学生ほど、大学進学への目的と手段の混同が起っているのだと言える。これでは大学生活で勉学に集中できるとは思えない。それでも大学卒業に必要な単位数さえ取得すれば学士として認定され、社会に送り出されてくるといのが実態である。これでは、中学時代に引き続いて毎日の授業で鍛えられる高専生や、目的を定めて教育を受ける短期大学校生と大学生の間に、その成長の点で差が生じても不思議ではない。

そこで一昨年、ある集まりで文部科学副大臣に出会ったとき、私は次のような主張と提案をした。

「日本の大学生が勉強しないことに対して、当社がインターンで迎えたインドの学生やコロンビアの学生が驚いていた。私の大学生採用経験での実感は、“日本は高い税金を使いながら、若者達を大学で遊び人に育てている”ということ。依頼を受けて特別講義をしたある国立大学工学部教授の話によると、“クラスの中で優秀な学生は、多くの場合高専からの編入生。そして大学へ編入して来た高専生が最初に驚くのは大学生が勉強しないこと”だという。専門学校や短大を4年制大学に格上げして次々に大学数を増やし、そこに税金をばら撒くのは間違いだ。現在の大学の4分の3は廃止し、その税金を残りの4分の1の大学に集中して授業料を無料にし、勉強しない学生は直ちに退学させるようにしたらよい。本物の学士を育てるべきだ」。

この厳しい提案をされた文部科学省の副大臣は大変驚いたようで、意味のある対応、議論にはならなかった。ところが昨年、文部科学大臣に任命された田中真紀子議員が、就任早々のあいさつで同じ趣旨の発言をした。すでに文部科学省の認可を得て準備は進み、完成間近だったプロジェクトに対する突然の中止発言に批判が集中したが、私も多くの国民もその主張には賛同したと感じた。

4. おわりに

私は日本の大学教育も大学生の有り方も間違っ

ていると考えている。知識や技術を詰め込み、あるいは学士というレッテルを与えることが大学教育ではあるまい。もちろん就職率さえ高ければよいというものでもない。一方の学生達も、学ぶことに意欲的でない人達までもが、一体何が目的で高い授業料まで払って大学への進学をするのだろうか？「良い学校に進学すれば良い就職ができる」という伝統的な、甘い考えがある。では一体何を以って「良い」というのだろうか？その基準が大きく変わってきていることに多くの日本人は無関心過ぎるのではないだろうか？大企業や公務員社会のように、伝統的に学歴が処遇に大きく影響する社会もある。では大企業や公務員社会への就職が良い就職なのだろうか？大規模なだけに国際社会に振り回される大企業や、巨額の借金で運営されている国や地方の公共企業体・機関や自治体である。

グローバル化が進行し、今日の良い会社が明日も良い会社とは限らない時代。来るべき新しい時代は個性あるベンチャー企業や中小企業が期待される時代。そこでは学歴さえあれば厚遇され、あるいは成功するという事はない。学歴がなくても生きていける時代が来たとも言える。必要なのは学歴ではなく、どのような変化があってもそれに食いついていける人間力と基礎学力、身につけた知識や技術を活用する力ではないだろうか？知識も技術も持っていることに価値があるのではなく、それを生かして初めて価値が生まれる。従って教育では、まずは年齢相当の大人に育成することではないだろうか？

生まれて74年、社会に出て55年、あの貧しかった時代から激動する現在社会まで、コンピュータ開発、ハイテク薄膜技術、アメリカでの現地企業設立、ソフトウェア開発という激動のビジネス世界を、工業高校卒という学歴、学力しかないままで生きてきた私には、教育には学歴というレッテルをつけることではなく人間育て、そして人間力と基礎学力を身につけることこそが最優先すべき役割だとの認識がある。私は現状の大学教育が続く限り、高専生や短期大学校生に期待し、これからも機会あるごとに「大学ではなく、高専、短期大学校への入学おめでとう」と言い続けたいと思う。